

必ず出てくる

「第二の吉田清治」

ケネディ日砂恵

在米日本人、主婦



新たな「加害者」の登場

吉田清治氏の証言を「虚偽」と認めた朝日新聞の「落城」後、反日左翼メディアは「第二の吉田清治」ともいふべき人物を見つけてきて、「慰安婦強制連行の証言は吉田清治だけではない」と宣伝してくるのではないかと、決して一笑に付すべきものではない。

十月二十日、調査と取材のために東京に滞在していた私は、同行して

いたアメリカ人のアルフレッド・ジョンソンから、重要な情報を聞かされた。

アジア・パシフィック・ジャーナルが、相模原市に住む九十二歳の元牧師で、「中国戦線で衛生兵をしていた」という松本栄好氏の証言を掲載した。インタビュービデオもアップされており、そのうえで「慰安婦に対する人権侵害の過去を日本は認めなければならぬ」と書いています。

この記事の筆者は外国特派員協会の役員で、一貫して反日的な記事を書いてきたアイルランド人ジャーナリスト、デヴィッド・マクニール記者。見出しは次のとおり。

《「やっぱりね、過去をちゃんと見えないものは、また同じことを始める」慰安所と日本軍の関わりについての衛生兵が報告》

松本氏の発言によれば、「日本兵が村を急襲して、逃げ遅れた女性たちを兵舎に連れて帰って強姦した」とい

う。また、氏が衛生兵として彼女たちをどうやって検査したかなどの描写もあった。

この記事そのものは、安倍首相や

同政権、国会議員や読売新聞、産経新聞など、河野談話の見直しや撤廃を求める声に対する批判がほとんどを占めていた。そして、こうした記事によく見られるとおり、河野談話見直しを求める人たちや朝日新聞を批判する声に対しては、ナシヨナリスト、歴史修正主義者、超国粹主義者などのレッテルを貼っている。

この記述についてはコメント欄で「そういった言及はインタビュービデオの中に見られない」との指摘があり、記者は松本氏による「似たような表現」がライターによる記事でなされていた、と釈明している。

そのライターの記事をチェックすると、松本氏の証言は「兵士たちは、彼らの順番が来たら時間を無駄にしないように、あらかじめ脚紐を解き、ズボンを下ろした状態で並んでいて、まるでトイレに行くようだった」(傍点筆者)で、決して「公衆トイレのように扱った」とは言っていない。

IWGの興味深いレポート

私たちは、書かれた記事には事実の歪曲があるのではないかと考え、さらに松本氏の証言の信憑性にも疑問を持った。そこで、松本栄好という人物と、記事を書いたデイビッド・



松本栄好氏の告白記事。「しんぶん赤旗」日曜版2013年8月18日号

ニール記者は書いている。「松本氏は、兵士たちが列に並んで彼女達をレイプして、韓国人女性は公衆トイレのように扱われていたと言った」と書

マクニール記者に関して調査を始めた。調査には、アメリカ人ジャーナリストのマイケル・ヨンも加わった。マイケル・ヨンはフリーランスの戦場ジャーナリストで、アメリカの軍関係者、政界、メディア関係者に大きな影響力を持っている。日本、韓国、米国にまたがるテーマとなっている慰安婦問題について関心を寄せている。

彼の名前は、十一月一日の産経新聞に掲載された古森義久氏の記事によつてご存知の方も多いかもしいれないが、ここで記事の誤りをいくつか指摘しておきたい。

まず、マイケルは韓国やシンガポールに取材に行っていない。慰安婦問題に関しての調査は、アメリカ、タイ、日本で行っただけである。彼はたしかに日本取材のあとに韓国と中国へ取材に出かけることを考えてい

たが、諸事情により実現しなかった。

また、国立公文書館に調査へ出かけたのは、前出のアルフレッドだ。アメリカの国立公文書館は登録したメンバーでなければ調査できず、マイケルはメンバーではない。これらは小さな誤りかもしれないが、マイケルの記事の信憑性を疑うキッカケになっては困るので、この場を借りて間違いを修正しておきたい。

そのアルフレッド・ジョンソンは先日、国立公文書館において、IWG (Interagency Working Group) の非常に興味深いレポートを発見した。

IWGは十七万ドルの資金と歴史家やFBI、CIA、OSSなどの資料と協力をもとに、二〇〇〇年から〇七年の七年間、日本軍の慰安婦に対する戦争犯罪の証拠発見を目的とした調査を行ってきたという。もともとIWGは、ナチス・ドイツの

戦争犯罪を調べるために発足したグループだったのだが、世界抗日連合のイグナシウス・デインの要求により、二〇〇〇年から日本の慰安婦に対象を絞って調査をするように変わっていたのだ。

アメリカ人の協力が必要

このレポートは二〇〇七年の四月に報告されているから、慰安婦に関する対日非難決議の資料とされたラリー・ニクシユによるCRS (米国議会図書館議会調査局) のレポート提出と同時期である。イグナシウス・デインは、IWGの調査結果を決議に利用しなかったのだろう。

ところが、彼と世界抗日連合の期待や要求とは裏腹に、日本軍による慰安婦への戦争犯罪の記録は見つからなかった。調査の最終レポートを書いたワインスタイン氏はまとめの

なかで、慰安婦に関した戦争犯罪と呼べるものが発見できなかったことを申し訳なさそうに記述している。

私は、慰安婦問題がアメリカまで広がり、アメリカのあちこちの地方都市に慰安婦像が建てられていることを憂慮している。こういった動きに効果的に反対していくためには、何よりもアメリカ人の協力が要だ。

実際にアメリカで十年暮らしているうちに感じたことは、慰安婦問題が日本では歴史問題として捉えられているのに対し、アメリカでは女性の権利や人権の問題にすり替えられていることである。

だから、日本人が「歴史の真実を提示していけばアメリカ人はきつと理解してくれる」と期待しても、もはやアメリカにおいては強制連行の有無は関係なく、「女性が望まないセックスを強要されたことがそもそも女性

に対する人権侵害であり、彼女たちは日本軍の性奴隷であった」という認識になっているので、論点が噛み合わない。

もちろん、歴史の真実が大切でないと言つつもりはない。特に第一次資料と呼ばれる、当時、そこにいた当事者の残した資料はこういった論議には欠かせない材料だ。私が言いたいのは、これは歴史事実や認識の問題だけでなく、ある種の地政学的な問題であり、「女性の権利」や「人権」といった問題が、感情的、かつ複雑に絡んでしまっているのである。

情報戦や宣伝能力に長けているとお世辞にも言えない日本人が、論点や文化の違いを意識しないまま戦うのは難しい。私は幾人かの保守派の男性言論人の方がそういった点に注意することなしに、ただ歴史の真実と義憤をもってカメラを前に語

り、それが却つてアメリカ人に「こういう怒りっぽい日本人男性だから、慰安婦にされた女性の心の傷を思いやれないのだ」と逆効果にしかならぬ印象を与えてしまったケースを知っている。

「彼女たちは売春婦です」と事実を言うことでさえ、女性が言うのと男性が言うのとでは印象が全く違う。しかも中韓が戦いの場と定めているのは、日本ではなくアメリカだ。アメリカ人の協力がなくては戦えない。マイケル・ヨンやアルフレッド・ジョンソン、その他のアメリカ人の協力を心から有り難いと思う。

松本氏に直接インタビュー

話を松本栄好氏に戻そう。調べていくにつれてわかったのは、松本氏の書かれたものが「しんぶん赤旗」に何度か掲載されていること

である。女性の権利や人権を建前として日本を非難する反日団体はいくつかあるが、彼らのなかには共産党支持者が多い。たとえばアメリカでの慰安婦問題の背後には、中国共産党と中国の反日団体「世界抗日連合」がある。

中国は年々、日本への非難を強め、韓国の主張する二十万人の慰安婦強制連行の話は中国によって慰安婦の総数が四十万人に増え、その半数は中国人ということにされている。そして、そうした主張を巧みに米メディアに売り込んでいく。松本氏の記事も韓国誌に掲載され、それを中国誌が取り上げている。

マクニール記者の記事を読んだ二日後、神奈川県相模原市にある松本氏が以前、牧会ぼくかいしていたキリスト教会を訪ねた。マイケルとアルフレッドも同行したが、教会には私一人で

行くことにした。

突然の訪問であるのにもかかわらず、牧師は教会のなかに招き入れてくれて、松本氏のことや教会のことなどいろいろと話をしてくれた。

牧師の話によれば、松本氏はいろいろな会から招かれて講演をしているようで、たとえば中国帰還者連絡会「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」などがある。

「松本先生は中帰連の方なのですか？」

「いいえ、違います。会などに招かれてお話しなさることはありませんけれど、中帰連ではないです」

「しんぶん赤旗に記事を書かれたそうですね？」

「記事を書けただけで、先生は共産党員ではありません」

「天皇制に反対なさっていらっしや

口元が、曲がったことの嫌いな強い性格を思わせる。こういった表現はご本人はお気に召さないかもしれないが、さすが旧日本兵という風貌だ。「はじめまして。ケネディと申します。ジャパン・タイムズに書かれた先生の記事を読んで、お話を伺いに参りました」

「は？ どこですか？」

「ジャパン・タイムズという、インターネットの記事です。デヴィッド・マクニールという記者が書いたインタビュー記事があったのですけれど……」

「知りません。誰ですか？」

「デヴィッド・マクニールという方です」

「さあ、知りません」

足取りはしっかりといらっしやるがお耳が遠いらしく、駅前の雑踏のなかでは私の質問を聞き取ること

る、と伺いましたが……」

「そうです。天皇の、いわゆる戦争責任を追及しております」

一時間近く話を伺い、松本氏のお嬢様の連絡先を教えてくださいました。

松本氏は高齢なので、いまだはお嬢様が取材の受け付けなどを取り仕切っているらしい。

早速、電話してインタビューを申し込んだ。何しろ突然のインタビューのお願いであり断られて当然だろうと考えていたが、お嬢様は全く見ず知らずの私の、しかも外国人ジャーナリストを連れた突然の訪問インタビューを戸惑いながらも承知して下さった。

指定された最寄りの駅改札口で松本氏を待った。霧のような小雨の降るなか、氏が現れた。氏は精悍せいけんな顔つきで、小柄ながら足取りのしつかりした方であった。真一文字に結んだ

っしやって、一貫性があった。氏は山西省の孟県の固兵団に、衛生兵として働いていた。所属されていた部隊の移動や何年から何年まで軍属でいたかなどは、ご自分の講演会のアウトラインを指して「詳しいことはここに書いてあります」とおっしゃった。

言葉はハッキリしているが、やはり耳が悪い。私が通訳するのも、時に耳元でゆつくりと、少し大きな声で言葉を区切って話さないと質問そのものが伝わらないことがあった。

となると、ここまで耳のお悪い方に、外国人ジャーナリストであるマクニール記者がどのようにインタビューしたのだろうか。とてもスムーズに事が進むとは思えない。私は、先ほどから感じていた疑問について、質問をして確かめたくなった。

「先生、デヴィッド・マクニールさんという方にはお会いになられたん

「吉田清治は嘘つきです」

松本氏の記憶はしっかりといら

が難しいようだ。同行しているマイケルとアルフレッドの紹介を済ませ、一緒にいらっしやったお嬢様とともに駅前のコーヒーショップで改めてお話を伺いすることにした。

テーブルについてインタビューを始めた。貴重な証言を漏らすことがないように、承諾のうえビデオも撮った。二人のアメリカ人がインタビューアを務め、私は通訳として松本氏の隣りに座った。

まず、マイケルが口火を切った。

「先生(Sir)、今日は突然のインタビューを承知して下さって有り難うございます」

マイケルはSirという呼びかけで敬意を示し、まず松本氏の軍体験を聞いた。

「知りません」

ハッキリとおっしゃった。ここは駅前の雑踏ではなく、静かなコーヒーストップである。質問はちゃんと聞こえ、理解されているだろう。

マクニール記者の書いた記事を実際に見せたが見たことがないようで、「ああ、そうですか……僕は全然覚えてないですが」とおっしゃった。

向かいに座っていらつしやったお嬢様が助け舟を出すように、「その方はいつ父と会ったんでしょうか？」とこちらに聞いてきた。お嬢様のお顔から、心配している様子が伝わってくる。当の松本氏はお嬢様の当惑している様子を見ながら、あつけらかん「ここにいるのは私の娘でして、よく世話になっていきます」と笑っていた。

反日団体から「第二の吉田清治」と

「もともと売春婦たちです」

慰安婦たちを売春婦と呼ぶことは日本でも大変な非難を浴びたし、韓国ではいまでも命がけだ。松本氏は「日本の罪を勇気をもって暴露する数少ない良心的日本人」と中国、韓国、左派メディアが宣伝する人物だが、その松本氏が躊躇することなく慰安婦たちを売春婦だと連呼している。

もちろん氏は、彼女たちが好んで売春業を営んでいるとは思っていない。強制されたと思っっているのだ。だが、慰安婦たちに給与が支払われていたことについては、

「支払われていたと思いますよ。そのうちのどのくらいが慰安婦たちのものになったかは知りませんけど」

さらに氏は、女性が強制的に家から連れ出されてレイプされていく様子を「見てきたように」語った。

日本兵が中国人の家に入っ

担がれている松本氏だが、ご本人はそのことについてどう考えているのだろうか。

「先生、吉田清治さんって方をご存知ですか？」

と吉田清治氏の名前を出した途端、氏の顔つきが険しくなり、大変な剣幕で、

「吉田清治は嘘つきです。あいつは嘘をついたんです」

と言った。心底、吉田清治に対して憤っているようだった。松本氏にしてみれば、吉田清治の嘘によって全ての証言が嘘と思われるようになったことが腹立たしいのだろう。とても「先生ご自身が、第二の吉田清治と呼ばれていらつしやることにはどうお考えですか」とは聞けなくなってしまう。ちなみに、「吉田清治さんにお会いになられたことはありませんか？」と聞くと、「いいえ、ありません」

き、女性を連れ出してレイプをする。

それはまさに「戦争犯罪」である。韓国人慰安婦たちも、日本兵によって次々とレイプされていった。当時からクリスチャンであった松本氏にとっては「我慢がならなかった」と言うのは理解できる。だが、それは本当なのか。

マイケルが質問する。

「虐待や暴力を受けた慰安婦たちを先生はどのように診察されたんですか？」

意外な答えが返ってきた。

「そういうことはなかったです」

「慰安婦たちは暴力を受けたり、虐待を受けたりしたのではないのですか？」

「いいえ。みんなおとなしく言うことを聞いていましたから、日本兵も暴力を振るわなくてもよかったです」

ん」と答えた。

虐待や暴力は「なかった」

衛生兵として戦地にいた松本氏は慰安婦たちの健康に気を配り、診察もしていたという。

氏は、慰安婦たちが強制的に連れて行かれたシステムを「挺身隊として連れて行かれて慰安婦にされたんですよ」と説明する。

だが言うまでもなく、挺身隊と慰安婦は全く別の組織であり、挺身隊員が慰安婦にされたケースは見つかっていない。松本氏はその点を誤解している。

氏の話は慰安婦の総数にも及んだが、とりあえず氏の所属部隊にいた六、七人の慰安婦に話を絞ろうと思いい、「どういう方々が慰安婦だったんですか？」と質問すると、何のためらいもなくハッキリこう断言した。

思わず、私も口を挟んだ。

「この記事では日本軍が慰安婦たちを虐待したようなことが書かれてありますけれども、そうではないのですか？」

「慰安婦たちはみんなおとなしく日本兵の言うことを聞いていましたからね、暴力をふるって言うことを聞かせる必要なんてなかったです」

氏は当たり前のことを説明しているとしても言いたそうな表情で答えた。

日撃はしていない

「慰安婦の方々は、どうしておとなしく言うことを聞いたのでしょうか？」

「言うことを聞かなかつたら殺されますから。だから怖くてみんな言うことを聞いていたんです」

「言うことを聞かない慰安婦が殺されたのを見たことがありますか？」

「ありません」

「では、『言うことを聞かないと殺される』とどうしてわかったのでしょうか？」

「いろんな本にそう書いてあります」つまり、松本氏の「体験談」には本で読んだ知識が入っているということだ。松本氏の講演内容を印刷したものを見ていたが、そのなかで紹介されている本は中帰連発行の小冊子と本多勝一、藤原彰、洞富雄（編）『南京大虐殺の現場へ』であった。

「先生は先ほど、『中国人の女性が家から強制的に連れ出されてレイプされた』とおっしゃっていましたけれど、それを目撃なさったことはありますか？」

「ないです」

「戦争犯罪を目撃なさったことはありますか？」

「ありません」

私たちは中国や韓国などの反日メ

が衛生兵として兵士たちにコンドームを配ったことだという。性行為をすすめたかのように考えているのだろうか。だが逆に言えば、性病を患った慰安婦たちがいなかったのは、兵が兵士たちにコンドームを配給したからである。私は「心配なさらないから」と言いたくなった。

ともかく今回、松本氏から直に話を聞いてわかったことは、マクニール記者の書いた記事とは違い、松本氏は戦争犯罪人ではなく、またその目撃者でもない、ということであった。むしろ、松本氏は現地の人々とかかわりは、中国人が治療を受けるためなど、氏に助けを求めて日本軍の部隊を訪れていた、というものであった。

ディアや、博士号を所持する外国特派員協会のデヴィッド・マクニール記者が、この人を「日本の戦争犯罪の証言者」として宣伝している理由が分からなくなった。

もちろん、松本氏は実際に戦地に赴いてはいるのだが、「戦争犯罪」に關して言えば本で読んで得た知識しか持っていない。本の読者が、その本に書かれている内容の証人とはなり得るはずがない。

松本氏は、ご自分が本で読んで得た知識を語っていることを自覚していたが、では日本軍の戦争犯罪を語る元慰安婦や旧日本兵などの証言者たちのうち、一体、何人が正確な体験を語っているのだろうか。

記憶による証言のいい加減さについては、エリザベス・ロフタス博士が詳しく述べている。彼女が言うには、人は本で読んだことや映像で見

に家に来てくれるように頼んだ時のことだという。

家に行ってみると、老人がすでに死装束を着せられて横たわっている。薬が効くかどうかはわからないがそれでも処方しようとすると、「どうせ死ぬのだから」と家族が止めた。文化の違いを感じたそうだ。

もう一つの出来事は、脇腹を銃弾が貫通した女性が治療を求めてきたことだ。これは助からないだろうと思いつつも消毒等の応急処置をする

罪の意識が話を大きく

と、二カ月経った頃に彼女が来て、傷が治ったことを報告した。「あー、助かったのか！」と驚いたそうだった。

ここで、松本氏の講演会での証言を引用してみよう。

「たことなどを自分の体験のように記憶してしまふ傾向がある。記憶というものは絶えずいろいろな感情や出来事とともに想起されるものであり、曰く「記憶は録音機のようなものではなく、ウィキペディアのようにどんどん書き換えられていくものである」。その記憶が昔の出来事であるなら尚更だ。

そういった「偽の記憶」は夢や催眠術、イマジネーションや偽情報によって作られていくらしい。博士は性犯罪において、DNAなどの物的証拠の不一致により無実が証明された三百のケースを調べ、そのうちの四分の三が「被害者の証言」のみによって男性が訴えられたケースであると述べている。

松本氏はいたる所で、「自分が戦争犯罪人のような気がして」と語っていた。氏の良心を痛めているのは、彼

軍（共産軍）と閻錫山の戦いに駆り出されて約五百五十名が戦死、七百名が捕虜となつて太原戦犯収容所に収容されます。

一方、日本軍を閻錫山の支配下に組み入れた張本人のSは、その功績で戦犯を免れただけではなく、閻錫山の相談役の立場で権力を振るい、太原陥落直前に飛行機で日本に逃げ帰り、自分が残した山西省の兵隊たち、つまり私たちは、各自の希望で現地除隊したことにしてしまったのであります。

ですから、八路軍との戦いで戦死した人たちは、勝手に除隊したものととして全くの犬死に、太原戦犯収容所で刑期を終えて帰ってきた人たちは脱走兵扱いです。

それはあまりにも酷いということ

局は相手にしてくれません。

また、旧満州関係の戦犯収容所は撫順にもありました。この人たちが中国共産党の人道的待遇のもとで、鬼から真人間に変えていただいた。

ということ帰国後、日中友好のために働かれるようになりましたが、寄る年波には勝てずに「連絡会」を解散し、この人たちのあとを引き継いで働いておられる方々が、初めに申しました「撫順の奇跡を受け継ぐ会」の人たちであります(氏は太原戦犯収容所に収容された人数を約七百人とするが、別の資料によればその人数は百四十人となっている)

松本氏は明らかに、帰還兵に対しての戦後の日本政府の対応に不満を持たれている。たしかに一九四五年から五二年までの間に旧日本軍にかかわっていた方々は、GHQの方針によって公職追放の憂き目に遭っ

た。松本氏が「張本人」と言うS氏についてはS氏本人の言い分を聞けないので、ここでも「松本氏によれば」として読んでいただきたい。

前述したように、松本氏は「撫順の会」には属していない。講演に招かれることはあるが三井鉾山に勤めていたため、ご自身は一九四六年三月十五日頃、佐世保に上陸した。悲惨な体験をした仲間たちに対して、それを免れたことからくる罪の意識のよくなものが、却って自分の「体験談」を大袈裟に語らせていないだろうか。

私は中国共産党による「寛大な処置」や「人道的待遇」など信じていない。食事などの待遇は良かったかもしれないが、「罪を洗いざらい告白して真人間に変える」などとは洗脳するために使われている手段であろう。

ただ、収容所に入れられ、それから帰国を果たした旧日本軍の人々を

責める気にはなれない。たとえこの人々が「日本の戦争犯罪を責める」立場に回られたとしても、だ。私の理解では、この人々は中国から受けた洗脳が解けないまま語っているだけなのだ。「お帰りなさい。国のために戦って下さって有り難うございました。これから、落ち着いて静かな老後をお過ごしください」と労らないではいられない。

やまない無責任な声

私が明確にしたいのは、こうした旧日本軍の人々を利用して、日本政府(いまなら安倍政権)を責める主張の愚かさである。

自らの戦争犯罪を告白して回る旧日本兵は、中国や韓国が言うように「良心的日本人」などでは決してない。ドイツと比較すれば、ナチスの隊員であった者は自分の犯罪の代償

を真に理解しているからこそ、ナチスとのかわりをひた隠しにして暮らしている。現在ドイツに住んで、自分がいかにユダヤ人虐殺にかかわったかを講演して回り、現政権に謝罪を要求する元ナチス隊員など一人も存在しない。

「戦争犯罪を告白する旧日本兵」が本当に「戦争犯罪を犯した兵士」であるならば、非難されるべきは当のご本人たちである。

終戦当時、戦争犯罪を犯したとき、一千名を超える人々が、B、C級戦犯として極刑を含む処罰を受け

ていた時には黙っていて、いまになって出て来て、しかも自分が犯した罪のために安倍首相をはじめ日本政府に謝罪しろと要求する——その卑劣さは、誰かに指摘されなければ気が付かないのではないだろうか。

人道に対する犯罪や戦争犯罪には時効はないので、「日本が再び同じ過ちを繰り返すことを恐れる人々」は、こうした旧日本兵のなかの「犯罪人」を国連などに速やかに出頭させて、きちんとした裁きを受けさせるべきだ。「良心的日本人」などと言って持て囃すべきではない。「犯罪人」と分

かっていて匿かくまっているとしたら、ご家族や周りの方も法を犯していることになる。

この事実をはっきりと指摘しなければ、「私は中国人を殺した。慰安婦を強制連行した。日本政府は謝罪しろ」という無責任な声はやまないのではないだろうか。

ケネディひさえ

群馬県出身。ミシガン州アナーバー市在住の四十代の主婦。アメリカ人の実業家の夫と、十五歳を頭に「女男の三人の子供がいる。二〇〇四年に渡米し、在米十年後の今年、日本への里帰りを果たす。慰安婦問題など歴史を素材にした反日言説・行動に疑問を持ち、日本文化の狭間で生きるなかでうまれた思索をフェイスブックで発信し、反響を呼んでいる。

言論テレビ

http://genron.tv

櫻LIVE あした
君の一步が朝を変える!

櫻井よしこ 責任総編集

毎週金曜夜9時 ネットで生放送

様々な分野のゲストを櫻井よしこの書齋にお迎えし、日本を建て直す提言・激論番組をライブ配信中です! 有料会員募集中です! 詳しくはホームページをご覧ください。



言論テレビ

で検索!